

8
9
80
1
2
3
4
5
6
7
8
9
90
1
2
3
4
5
6
7
8
9
100
1
2
3
4
5
6
7

先進彌像玉不雜誌續篇卷第三目錄

日置彈正正次入道道以肖像并傳

日置朝臣

日置達

千箭立百箭鞠

姬鞍錦鞍

蒲鞍

革鞍

步鞍

胡鞍

鞆

神代弓弓

御乃調

追物射

紀伴兩家射法

坂上家射法

内野合戰

吉田重賢

高野威德院

的場

卅六步の的

五十一間弓的

廿六間弓的

廿二間弓的

的

十三間半餘的的

上毛野氏弓術

麻弓伎

儀禮弓侯道

枕都弓

遠箭

明高額

八條近江守藤原房繁肖像并傳

八條村八条官八條殿

軍團兵士弓馬

長尾丹後守景家

八條六郎朝繁

柏子翼

驥裏

龍馬

馬方万首

高食官

高麗流新高麗流

先進繡像正不雜誌續篇卷第三目錄終

王續三ノ目

日置彈正正次入道道以真像

高野山威德院藏

信光手
慕



曰置諱正次入道道以ハ大和國人ありと云一本ふる
姓氏錄ふ日置朝臣ハ應神天皇皇子大山守王乃後也
續日本紀合と云也日本書紀ふ就く考入れよ仲姫乃
皇后乃娘高城入娘乃所生子額因大中彦皇子大山守
皇子去來真稚皇子あり大山守皇子も土形君榛原君
允二族乃始祖也と云里續日本紀寶龜八年四月甲申
從五位上日置造雄ニ成等曰人了鳥井宿祢正八位下
曰置造飯廢等二人小吉井宿祢を賜ふとあるは在京
皇別日置朝臣とり同一からい姓氏錄う左京諸蕃曰
置造高麗國人男馬玉裔孫裴古君乃後也あるひ大和
國諸蕃曰置造高麗國人伊利須使主より出と云るが

色は鳥井吉井兩宿祢も高麗人乃裔と知ヘ。然とは
曰置朝臣也應神天皇乃御裔曰置造也外蕃乃種類と
別る也共大和國乃人亦あと云論あし但諱正次入道ハ
朝臣乃姓あるや造乃姓あるや考いた
射藝を好み殊了其精妙を渾たり吾國弓術中興乃始祖
と云也。抑皇朝ふく弓箭を用ひらき弓箭を尋るふ素
戸向り射と相見テ後永退てんと請れ。昇天より時
天照大神背ふ千箭乃鞬と五百箭乃鞬を負臂ふ稟威乃
高鞬を着弓彌振起しと日本書紀ふ見テ色は號ふ神
代木瀧觴せり日本書紀一書ふ乃丈乃武備を設玉ひ
代木瀧觴せり日本書紀一書ふ乃丈乃武備を設玉ひ

又背ふ轍を簫一束臂ふ猿威乃高鞆を着て手ふ弓箭を握
者とあるふく神代より支えの武備す弓箭を取ひて
を知へ

を知へ

を知へ

千箭乃轍古事記ふ千入之轍五百入之轍と記された
きり乃利とひ入乃字乃訓と知る軍防令ふ征箭五十
隻胡錄一具と云二代實錄貞觀十六年九月十四日己
亥檢非違使起請五條乃其に小謫府舍人胡錄乃箭數
を減して定む廻し令條ふ唯まる了兵士箭數五十隻を
以て一箭ふ盛りむ而す今人力微弱ふして五十隻を
帶難し勘責せざ共肯て准行せ以乃卅隻以下廿隻以
上大至を帶せり非常乃備豈斯乃始てある廻へけん
や誠ふ是斜責重乎所あり人心甘服せ所あり致せ巡
も

あり望請尋常平懷乃時卅隻を以て定と為て放帶著
朱めん但節會行幸及ひ臨時鑿固乃日ひ法乃依て五
十隻不滿しめ武備闕乏せても廻りと見ゆ也ハ五十
十隻ハ一胡錄乃宣數大忌と大寶乃初より貞觀乃末
小遠く百七十餘年更ふ變革かしと知る但東大寺現
存天平舊物乃鎧重さ十に錢五分より六七錢ヲ及ひ
幹乃重五錢以上又五重以て五十箭を挾ふ了七百錢
ふ及ひ胡錄乃重キをかえり既ふ一千錢又近し帶難
そと云ふ理かとふあひて明乃高穎明乃復宗・隆慶五
元龜二年あり崇禎十年六十七歳不^ノ生日本の
射學正宗を著て日本寛永十年子當る射學正宗を
著ハ^ノ云弓矢桐配を教と權衡乃如く然今毫毛過

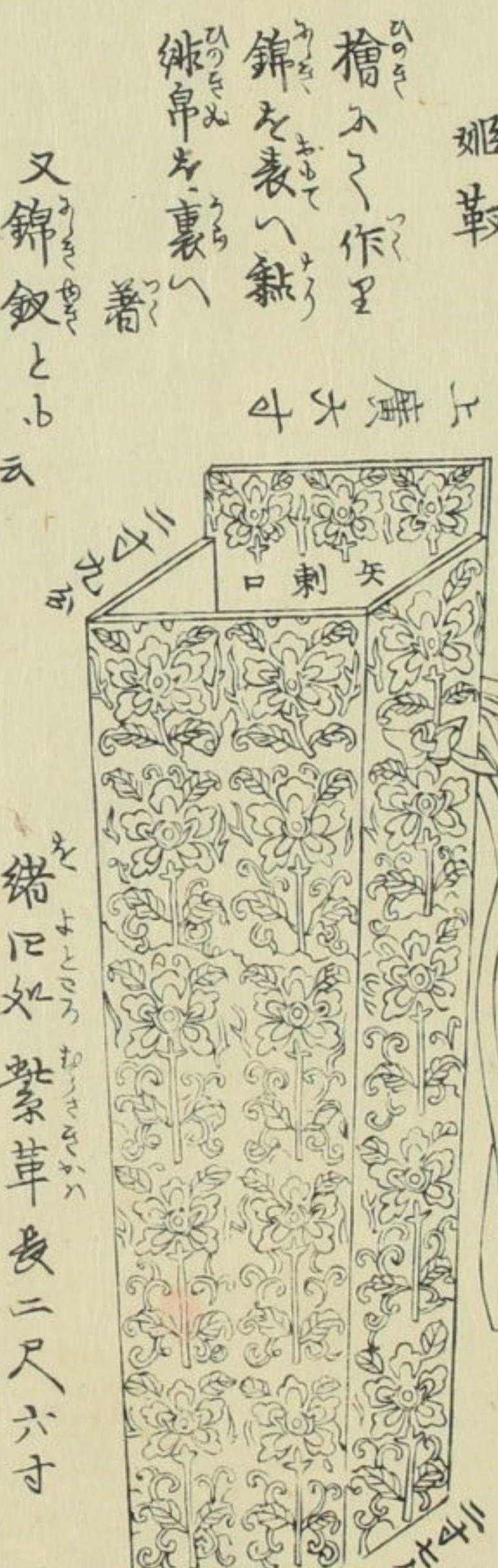
差をへりし大約弓内力量十斤者箭一錢二分を用ひ
百斤乃弓内は箭重一兩二錢か弓座レと云里明秤の

一兩二錢も日本今秤乃十二錢百斤も十六貫同が是
百斤の弓とハ弦へ百斤乃鎌
を懸ミ弓形をあさを云れ

鞍乃圖

諸古圖を集録より参考を備入

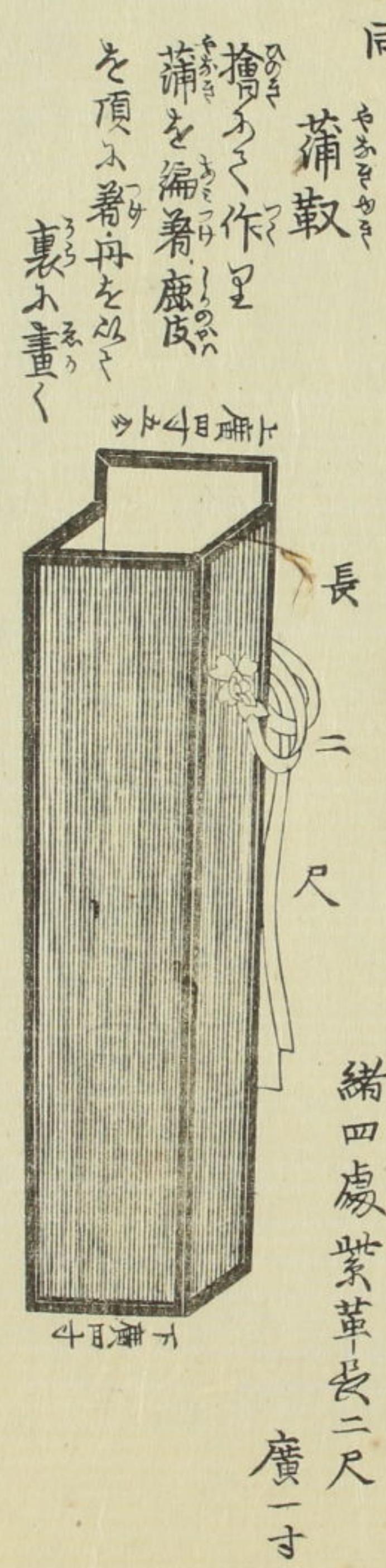
太神官神寶
後長二尺四寸 前長二尺一寸六分



又錦鉢と云

緒に如繫革長二尺六寸
廣一寸三分

斗脚



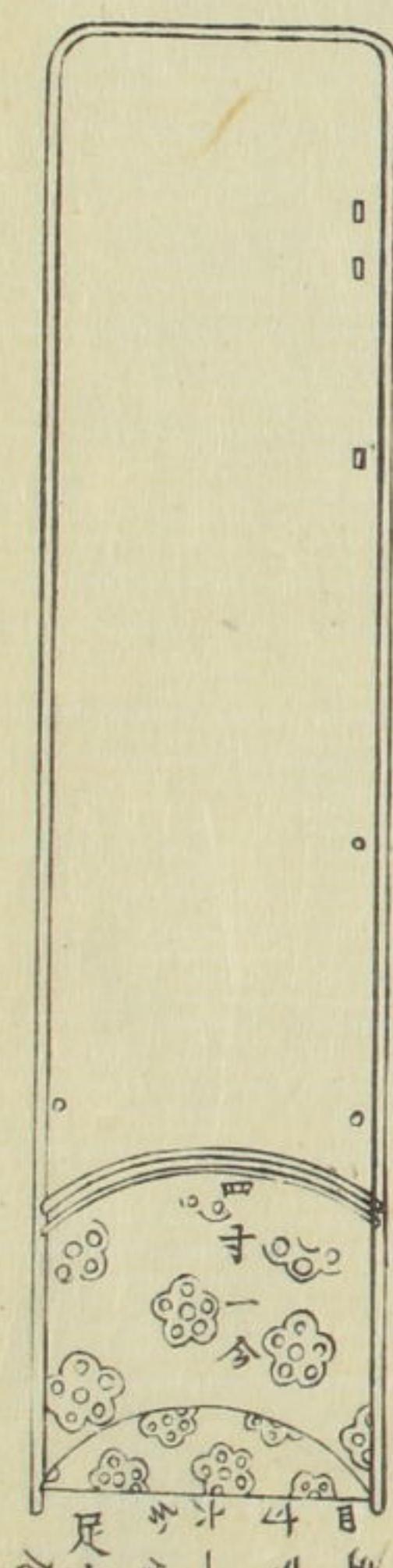
同

革鞍

捨ふく作里布を
着黒漆小塗

大和國
法隆寺藏
錦鞍

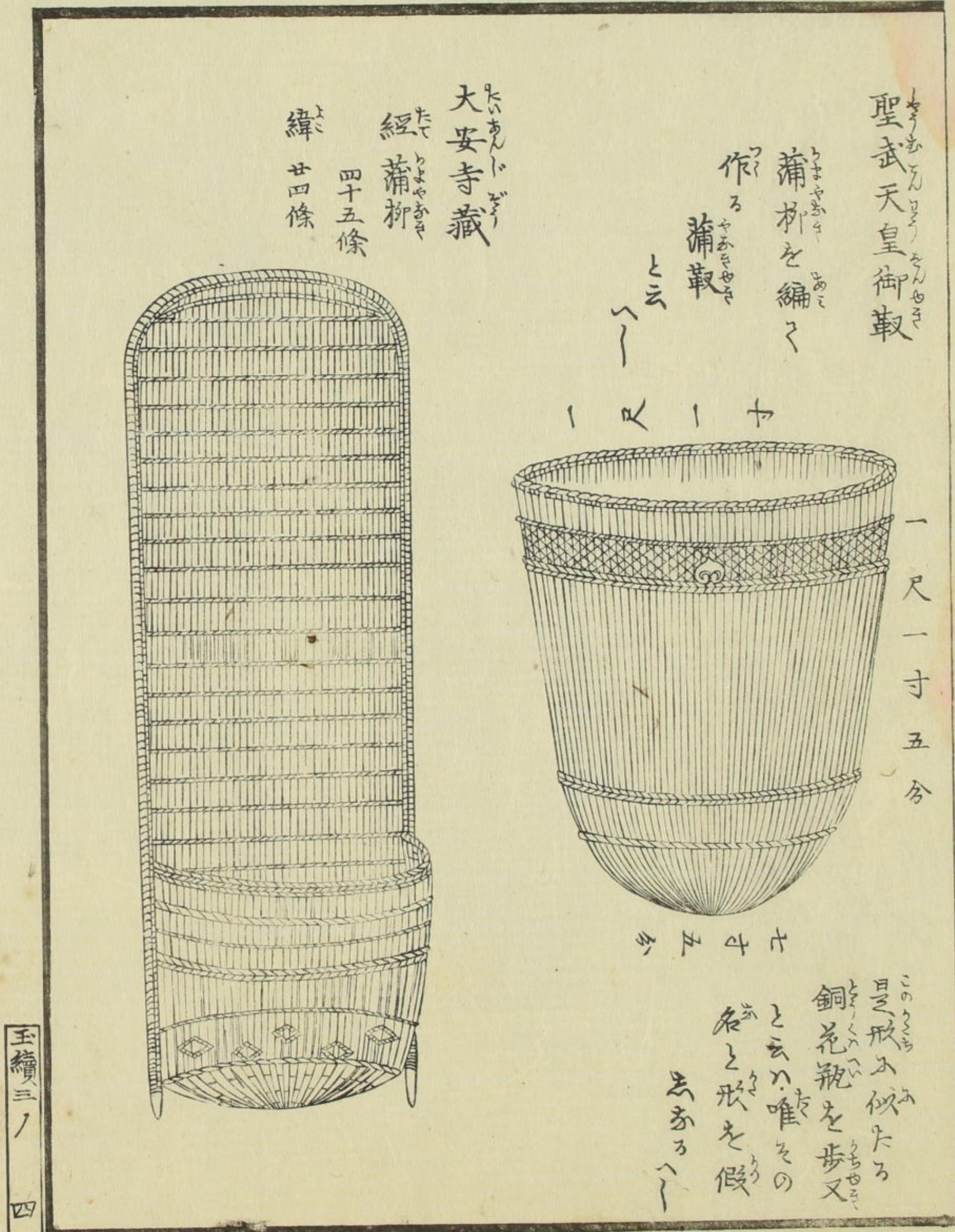
長二尺三寸



桐ふく作里布を
着黒漆小塗

足高四分

軍乃形是革不就考知へ一・但法隆寺ふ傳也此物
 と推古天皇十一年十一月・皇太子・天皇了請て大袖及
 ひ鞍を作ふと・日本書紀ふ記せ也一器からんふハ頭ふ
 千二百に十二年・天保甲前乃製と知也一・釋名ふ矢を
 受る器皮を以て毛を服と云・竹を織たふを笠と云
 歩又ふとく人所帶と云・馬上に鞍と云う矣並てその
 中ふ建ふ義あ里と云・然る時も歩と騎と班器同じ
 らざること・皇朝乃ミからば・西土と云共又然あ里と
 養速日命乃天表とせ・却載と云物あるふと・軍防令
 兵士乃備具・騎士・步士と別載させとも騎士を首と
 步士を推知へ々其具是も先期錄を舉く・鞍をり



畏せ里胡錄も唐令の文字のみ集韻ふ鞶おつと云。鞶
 廣韻了箭角と云ハ蒲鞶乃形乃如之物あらん。皇朝ふ
 ハヤナクイと云今按了蒲鞶乃キユ約シムクと云
 里キト仁と通音あるとハヤナクイ即蒲鞶あるへし。然
 く聖武天皇御物の蒲鞶より歩去の具あるは歩鞶と云
 て太安寺乃鞶も騎士の具とある胡錄と知る

鞶乃圖

吉部秘訓抄所載

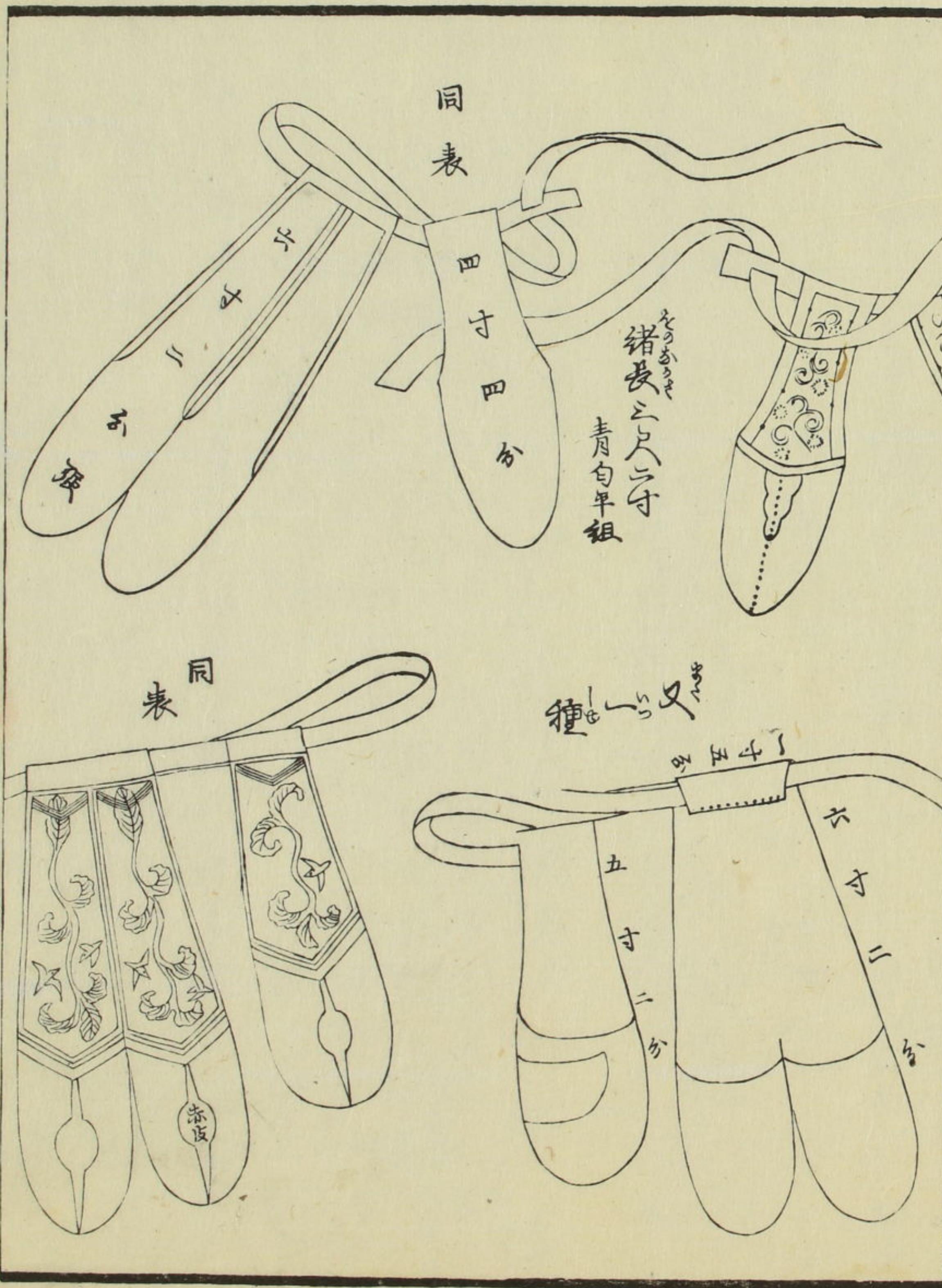
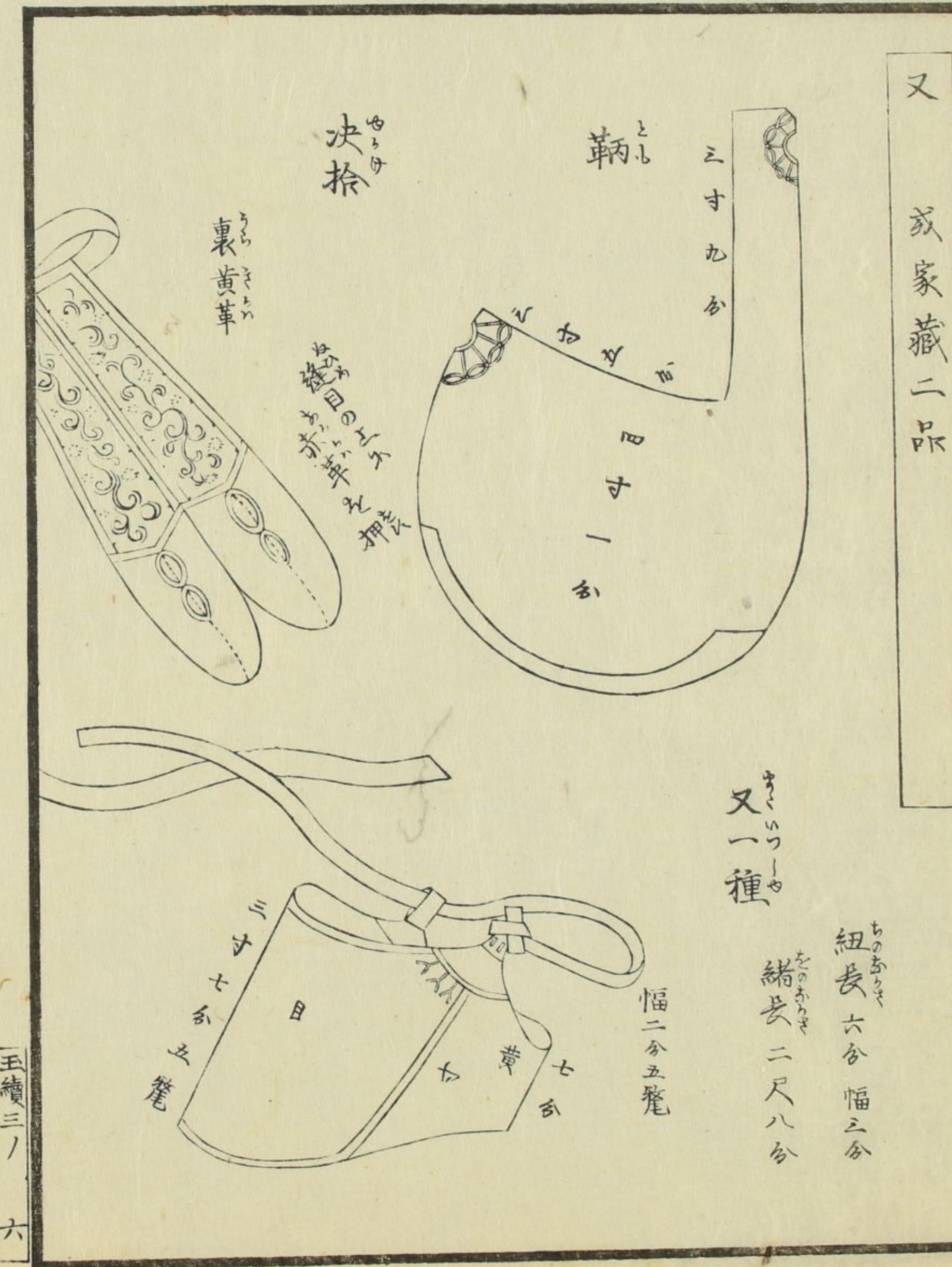
鞶乃懸本様

吉部秘訓抄の
 吉田権大納言經房御
 乃抄あ里正治二年
 閏三月十一日五十八歳
 薬せらる。今又保
 十五年より六百に十五
 年前あり



又 戒家藏二品

又一種 紐長六分幅三分
緒長二尺八分 幅二分五釐



高皇產靈尊乃天稚彦あらは乃鹿兒弓かのこ乃羽矢や矢やを賜たまふ
天恩日命あめのひめい乃背入天櫂あめのひめい鞍くらを負お・脣くちノ猿さる高鞆たかとを著お・手て小天
施弓はしゆ天羽矢や矢や八同鑄きよを取と・皇孫みやこみの乃尊そん乃前驅まへぐ・彦火ひこひ
出見尊しゆそん乃弓箭ゆきせん持もつ・ひ乃革かわ車くるまモレケモレケ・總さへ神代じんだい乃と
赤あか里さと神代じんだい奉まつ・目め神かみ乃擦すりセ人ひとを座陣ざぢん・引ひ天稚彦あらは賜たまふ
出見尊しゆそん乃持もつセ人ひとを護持ごし・彦火ひこひ乃
弓箭ゆきせん持もつ・神代じんだい乃引ひと以ひ・人皇ひとみこと乃世よと赤あか里さと神武天皇
乃御兒ひめこ五瀬ごせ命みこと乃孔舍くの街坂まちざか乃戰たたか人ひとノ流矢なげやノ肱うでを傷いた・綱
鍔つばを造つくり・矢部やべ乃箭や箭やを造つくり・倭しづか乃鍔部つばべ・天律あまづ真浦まほ真麗
靖天皇あきらめのひめ乃御時ごとき弓部ゆきべ稚彦あらは乃弓箭ゆきせん・男おとこ乃弭ひ乃調しらべ・定さだめ
らさせた里さと・是これハ正丁まこと乃調しらべを收めら・教おとす・善射よしやハ其藝そのわざを藉せき
志し・調物しらべもの乃代たとへ・然しかハ世舉よきよ・其藝そのわざを尚たたけ・よつ里さと・美濃みの弟おとこ

庚ひ伊勢朝いせのあさ日郎ひつゆう疏よ繫物部よ各かく善射よしやを以もつ・著あま・庚ひ人ひと乃ミ批
伎わざを善よせ・ふああ・雄累天皇ゆめりあそ乃射殺のぞ・玉たま・市邊押般天皇いちべのあくわ乃射殺のぞ・馬ま・猪いのを射のぞ・損そん
鉢はつ・後漢書こうきんしょを引ひ・おもひ乃おもひ・乃訓いふ・と訓いふ・乃填まつ・乃蓋あわせ・乃馳射のちしゃ・乃射のぞ・乃家いえ
清寧天皇せいねいあそ乃射殺のぞ・百寮ひゃくりょうをよ・海表かいひょう使者ししゃ使まつ者もの・射のぞ
キセ・赤あか人ひと・長なが・小こ・肩かた・宿しゆく・称めい・黑鐵くろてつ・肩かたを射のぞ・貫ぬき・道島宿どうしましゆく・
島尾しまお乃騎射きしゃ・中納言紀ちゅうのくわん・腰こし長なが乃步射ほしゃ・乃容儀のうぎ・乃弓ゆき・得とに位い
下紀真道まことのひ・復おもど・位い・上じやう・伴宿ともしゆく・旅たび・和わ・多廣たかひろ乃射法のぞ・世よ・乃墓お・範はん
と赤あか・批ひ・藝わざ・ふ頰ほほ・ふ者もの・兩家りょうけ乃法わざを宗むす・とせ・さ・お・へ・あ・へ・あ・へ・又また
坂さか・上じやう・荷は・固たが・其その子こ・田村丸たむらまる乃子こ・清野きよの・父ちち・子こ・世よ・精射せいしゃを以もつ
世よ・小舉こあき・ら・將軍しょうぐん・顯職けんしょく・膺お・叛はん・賊ぞく・征せい・殊こと勲くん・を立たて・雖ま・雖ま



小於弓武藝乃考第弓馬を羽田人を以て上とせらるく令乃
定め族掲烏丸里近院乃右府須能有六孫王紀伴兩家
乃射法を傳え以て外孫經基王又授く經基王又を滿
仲朝長ふ傳え滿仲朝長あきを賴光賴信兩朝長了授く
賴光朝長も別子養由基乃射法を海外承家訓ふ食せ
く其子孫乃傳え賴信朝長も其子賴義朝長も傳え賴義
朝長乃子義家朝長及ひ義光義其藝を繼義光乃子孫能
其庭訓を守教又坂上清野乃弟子奥羽野總ふ寔し蘿原
秀御最傑出大里其子孫佐義清西行法下何邊行平武
義資賴等家々傳え流々互ふ習を承遂小後世各別を
争ふ矧應仁乃亂後文武乃道共ふ大厄了遭古實まほふ
散一と云

廢れんと以て正次入道是を憾き四方乃游學ノ々強弱審
固持満乃六率を考究し獨々乃精妙ふ通し古今ノ遙徹
と同姓乃葛輪と云者ありよく的を射る常不正次入道
と藝乃優劣を角す即京ふ上り共ノ其伎を試入道是不
勝一やハ遂不名人乃称を得大里當時京都擾亂ノ々内野
戰場とある正次入道弓矢を執く敵を拒き一矢敵多く矢
不應テ斃死矢既不盡大里は堤下ふ隠也居テうら若不敵
さく嚴束る入道立よりゑいと云々弦弓を敵恐れく處
内野合戰何年か不や未考明應九年入道五十餘歳と
云ふ依く考入道ハ文安寶徳乃頃乃生也と知る應仁

亂も二十餘歳の時から然らへ應仁二年九月七日細川勝元へ文義直・山名教之・舟岡山乃陣を攻一時ふや

猶考へ

明應二年二月十九日近江國蒲生郡河森里小室里吉田上野今源重賢り的を射る密儀乃元から弓矢を見即入く教ふ了自得乃妙を以て以重賢も近江源氏仇木源三秀義乃末子吉田嚴秀乃裔孫か里其母三日胸に入と見て懷姪一重賢を誕すきせば慈母七歳乃春膝下小接く教く云く彌月ハ弓乃象形而弓を擧んく名譽を末代に傳ふよとく星を習むも天性乃器用かせば志摩乃須木至く國中小宿を並ぶ者か一然共いま

良師ふ值遇せりふとを歎き吉田八幡宮ノ一七日參籠し
そ星を祈る滿願乃曉白髮乃翁一手乃箭を携來里其子
をよく星をと云く去と夢見た里覓く考ふる了矢を
上ふ手え上手乃謎か里然ハ我所願成就を極キ端夢
お持有あせと憲く歸れおおせひ嘗く敬禮し且長男
出雲守重政より十六歳あるを見しめ父ふ共ノ四次入道の
弟子とある朝暮ふ修行志けふる入道向地ヲ立出く何
地行々し我乃消息をちらひ重賢父ふ慨歎と云共其甲
斐翁一 片岡家譜ノ明應九年正月十九日乃入道近江を去
ミ伊賀國小室里住し明應九年正月二度重賢乃家小室
里唯邊一人乃ハ使を授與し印可也同年九月中旬飄

然と阿森乃里を立去紀伊國ヲ越キ高野山ノ昇里
心院谷ヲ入テ剃髮し瑞鷗光坊と號シ威德院ふ同宿

ちく遂ニ爰ニ物故を行年八十九歳とかや

日置彈正的乃書弓的場と射場乃間也十八間定法と
ミ敷雖然内矢場あとふそひ十二間十三間ふかせへと
云々信充云的場乃丈尺内裏式正月十七日觀射式
豊樂殿乃庭又東西行卅六步又第一乃候を張とあり
卅六步者廿一丈六尺あつま弛乃廿八丈余と仰也江次
第射場始乃象又棚去射場廿一丈六尺とあるも卅六
歩あふて明けし紫宸殿乃西清涼殿乃南校書殿乃前
北より南へ廿六丈乃地を射場始賭弓乃場とあると

云ハ卅六歩を用也るヲ是里恒星也朝家乃規矩と
通し武田家弓書弓的をば卅二杖又寺棚より前へ二
杖よせく串を立家形里卅三杖ノ廿尺丈七尺五寸
間一尺五寸又廿七杖又小赤廿尺二寸五分
寸赤里五寸五分丈七尺五寸五分丈七尺五寸五分
寸於里五寸五分丈七尺五寸五分丈七尺五寸五分
十八杖又吉乃十三丈五尺赤里六尺一間乃法尺三十三
尺八寸二尺五寸赤里十丈見者も新羅也即以東
相傳乃丈尺赤里と云ハ即是伊豫守賴義朝臣乃遺教
ふく其淵源也紀伴两家乃法大弟と揚鳥赤里と
へく赤里十五間乃的場日置彈正了起弘正是ふ於く
證ありと云極き於里

儀禮・御射禮・候道五十弓とあり。一弓とへ考。乙記了
弓之下制六尺と云。後人庵へと鄭康成乃注。又見。考
乙記乃六尺。今乃は尺五寸五分に覺。亦里五十弓也。廿
二丈七尺七寸三分當る。皇朝乃歩法。又卅六步七步五尺七
寸亦里内裏也。乃卅六步より里一步五尺七寸贏也。里是
者。侯外乃地。十尺乃公あ也。全く卅六歩乃侯道と云
也。く且三代乃遺制を仰瞻。きあつ是里。又七十弓乃侯
今乃卅一丈八尺七寸八分。當る。九十三弓乃侯。今乃
皇朝乃五十三間七寸八分。亦里。十八間一尺八寸六分。亦里
尺八寸六分。當る。皇朝乃六亦里。七十弓の候也。即卅
十八間一尺八寸六分。亦里。云然。乃的場と同。一曼。又於之皇朝漢魏六朝隋唐乃故
を傳人承工乃正一弓を知。

告部秘訓抄。云。近代弓師事近來。毅方を以て。公私師と
亦せり。毅方乃子。毅經又死乎當時習傳る。毅剛と。諸近
々あ絶んと。と教り。今度。忠季朝長。隆房姫。小習入。内府
忠親。毅方。又尋ら。而忘却と。称せら。教へ。乃は。云々信
清定忠行等。能娘。乃弟。又。子と。教え。と見。也。毅方と。ち
尤。迎將監。上毛野。毅忠。乃弟。亦里。然。ちば。是家。乃藝。云々近
衛府。了傳。大色系。皇朝。終。よ。相角。乃子。術。亦。而。而。又。其
弟。子。内府。も。中山忠親。公。ふ。く。花山院。權中。納言。忠
忠。卿。の。次男。亦里。隆房。卿。とは。に。条。權大。納。云。を。云。隆季
乃。權大。納。云。乃。子。ふ。く。平。相。國。禪。門。海。乃。婿。亦里。早。家
ふ。は。冷泉。内。大。宝。能。卿。と。ば。撃。に。權大。納。言。を。云。讚。岐。二

位事行卿乃二男ふく刑部卿敦兼朝長内孫あり忠行
とは定能卿の舍兄弟重季乃龙中將乃男揚梅乃兵部
卿を云信清と名七案修理大史信隱卿乃男太秦乃内
府乃いよく權中納言ふくを云信清ム年元ス
貴部御訓乃依者慶是人乃習入處ありは朝儀
乃ち十二年スあた也里
乃射禮ふく貫革乃藝アシテあらさみ極一古事談云
中院入道六ヶ乃能ありと云弟三乃木々木とあり末
末本とは延喜式御持弓一張箭ヤヨゲ具ハチ木大伊
多都伎一具ハチ細伊多都伎一具ハチ木大伊多都伎一具
多麻々伎鐵十二兩二分熟洞三分已よ麻々伎鎧料と
見云たり個具て少五十隻乃定も形り十二兩二分云

今秤ふく百四十錢六分二釐又毛あり三分九錢に
合三釐七毛又絲あり是を五十乃麻々伎乃造る時
一箇乃糸二錢九分八釐一毛ニ絲又忽不當乃鑄る凡
三分九毛一を耗し一錢九分八釐七毛又絲を以て麻々
伎鎧の重きと考と知れたり羽矢雉子乃羽を用ひ表
と持弓乃長七尺六寸乃曲尺を用ひ然並け麻々
伎丸平頭を鐵ふく作里長弓乃弓不具ノく的を射折乃
物亦教と知く身麻々伎弓と云名小起れ乃於是後
類聚劍不唐齒簿令乃細射弓箭を萬枚岐由美と記せ
乃細射と云上射を云上馬を細馬と云如皇朝乃
後鷹乃諸侯麻々伎弓箭を握を以て齒簿江次第小真
卷弓矢と往せ一矢的弓乃弓不具ノく真卷乃字小義

年中行事繪 賭弓着鞆圖

年中行事の

競東光長筆

と云々

先要ハ

氣圖ス

伏見院乃須乃入と

弘らへ西應永仁乃降

五百五六十年前の

國と氣へ



俵藤太繪所載射儀



俵藤太秀卿・湖水乃惡神を
射んとく鏑箭を打番
體かくの如一是射法
所謂審ふく意心
をく用ふ發と云
ふる

本間家ヲ書ふ組を
とく事馬手の手かる
を引手へ渡一馬手みて
紐を解く肩を打越く
後ふ後の組を腰了度
さく馬手の組を
三卷かいよ素獣の
あいへ押入さく矢を
やけふきしへーと云ひ
ゆるまねふや

ああ了非と御名を園太磨了中園入道相國乃真弓小義
 及ヒ棒を巻かばは真巻と云ふも近代了は紙を以て
 無棒了替ふと答ひ一と近衛司弓引ふしく所謂細
 射弓箭前から眞巻の名義も違へきとの如き於かとハ論が
 之形見一説弓麻矢伎弓・繩本弓木ボア作を伏く弓と
 之形見一説弓麻矢伎弓・繩本弓木ボア作を伏く弓と
 云ふと云うと大とへり人の子を養人く我子と云ふと
 云ふと云う如一とありと云ふと云うと云ふと云うと
 何故と云へキ依て今ま一説を聽き又一説を察
 裹の弓が里と武士弓引をば尤都也と云即我身の
 も云今弓引を弓引をば尤都也と云即我身の
 すふく七尺五寸を圍み麻矢伎弓引小比弓追は杏弓
 短弓物弓里又鎮守府將軍基賴朝臣弓馬弓藝鷹突
 乃伎世弓腰也給ひし事子孫弓傳を教ふや續々考
 み極や射里

戰國集弓蘇秦韓王弓説弓言天下乃良弓勁弩皆韓弓
 里出六百步弓外弓射と云弓蘇秦弓時弓六百步弓令
 内二百七十丈二尺にすかばは間弓又弓接弓又弓
 百八十丈間余か弓町法弓七町三十丈間弓當弓皇
 朝弓又弓坂上田村弓精射弓弓勢弓不中三人を射
 遠弓其礮弓頃龙兵衛督茂氏城乃前弓小礮弓弓葉弓
 けふと弓里田村弓乃弓遠矢十六町弓及弓と云弓又
 吉野十津川弓兵士弓指弓三町弓遠矢八町を常弓と
 云弓ハ韓弓良弓弓異と為弓是弓あり後魏書弓靈丘
 乃南弓山弓里高弓百餘丈弓成帝弓を彎弓矢を發弓生
 て三十餘丈弓一弓山南二百廿歩弓過矢里と云里是

劉宋乃文帝及ひ孝武帝乃時ふく
里晋後人を用ひる世あるは一步も皇朝曲尺乃人
八寸に分一龜三毫一絲八忽余あ里二百卅步も百十一
丈三尺五寸三毫一毫七絲余了當か。步弓ふく百八十
五間之尺八寸余あせば即之町余あ里又金史う太祖
乃射三百步う踰一里を記す。今乃一步も皇朝曲尺
又尺七寸九分六毫ふ當か。三百升歩も百八十丈に
尺七寸二分承り。歩弓ふくハ三百九間了當れば即之
町餘あ里。但金太祖乃即位元年ハ鳥羽院乃永久三年
乙未ふく鎮西八郎為朝乃誕生。保延六年より安に年
前あり東西相繼々精妙乃射藝世小出くと云ひへ

明高額字ハ叔英。隆慶六年辛未歲入螺城。不生家。皇朝
二年ふ弱冠ふく同邑乃善射猿履。猿履。李茂修
ふ從く學ひ。よく錢三特と云者ふ考へ。萬曆廿一年癸
卯歲御舉ふ應。一けふく手を握く的く向ふとふ虚矢
矣。之吳湖廣所。同志内者相推く弟第一とし。自古亦
得た里と思へ里時うと也。其後十年を経て同に十
一年癸丑歲試ふ京師。不舉。らむ。列九邊列鎮の諸材
士と。子を抜き。馳射。不失得を講究。もく初く舊習の病
を悟り。終く我臂乃我用を為さ。教を知るとや。是ふ
精く更めく尤射をあし。新習内手を試み。又年ふく
機熟し。絃子應。一矢を命を取と。又後。竟り如く威しと

云後又右射をかゝる崇禎十年射學凶宗を薦ひ時ふ歲
六十七年覲永十に其審法穀法勾法輕法注法乃如之へ
全書あはば今爰入云以皇朝乃關六藝藤原一安元龜
二年辛未ひ城國守治郡山科の御子生教高額と同甲
又赤里侍寢在衛門入道道雪ふ後又學ひ後ふ其子と
あれ里道雪も日置彈正入道乃弟子告田上野入道道
實乃嫡子弘雲守重政乃二男六尤衛門尉重慶乃弟子
おは去は日置入道よ里又傳ノ道雪う重慶・六傳ノ
マニ安家是一安高額と同年ふ生也たとは日置入道
エ高額乃學ひ一法と源をへふせんかと辭を待ひし
て明り承定と云へ

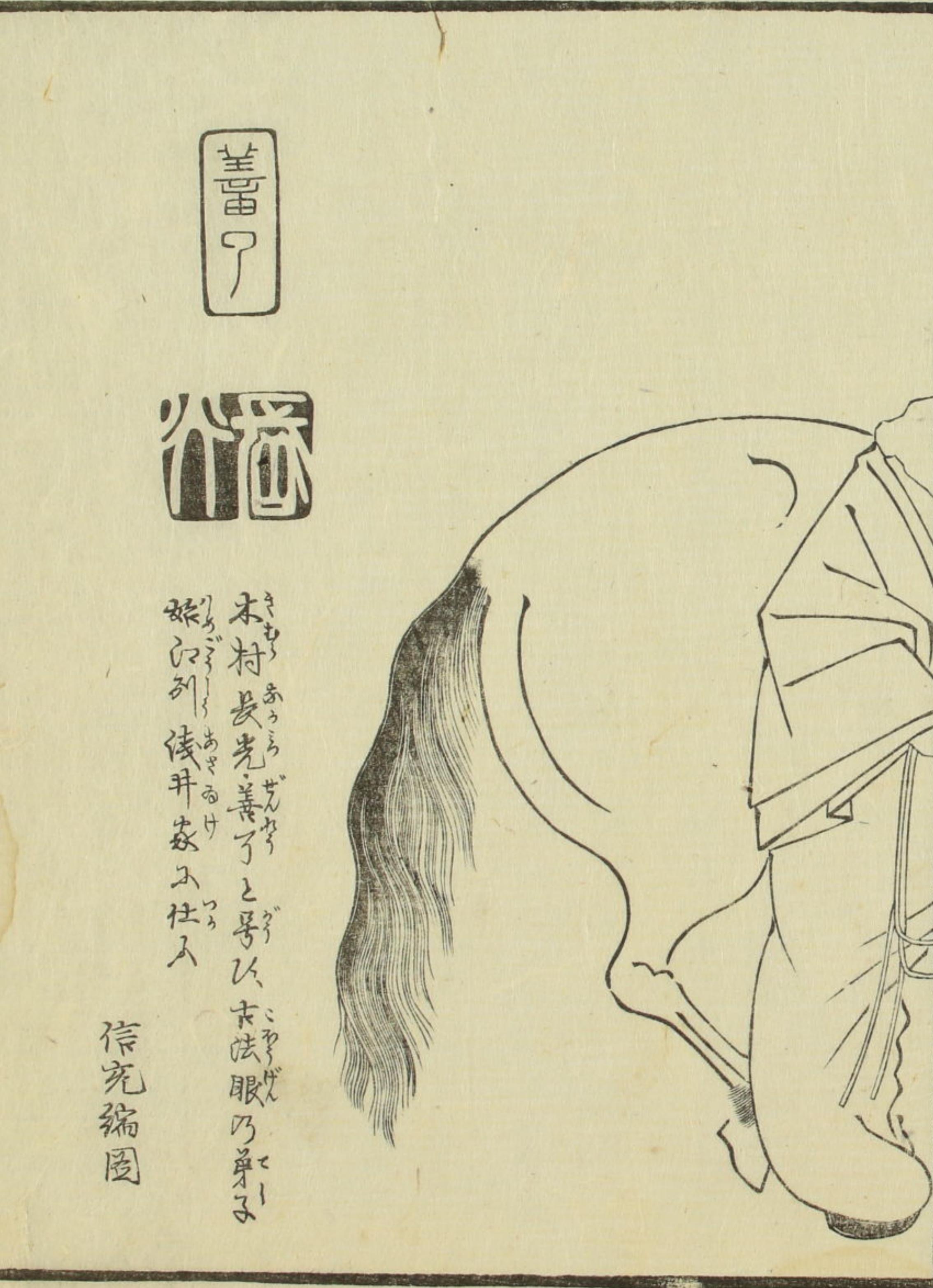
八條近江守藤原房敏家ハ掃部介房藤乃男か里・房藤乃女
を修理亮滿朝と云童名ち童增丸・中務大輔朝顯乃男
朝顯も上板諱正少弼朝定乃二男ふく・武藏國埼玉郡八
條乃里ふ住志改姓は世ふる八條乃上板と称せらう・終
トハ衆と乃ミ呼へゆ有ノ於里
武藏國埼玉郡八條村も大神宮乃御領ふ・神鳴抄ふ
大河戸御厨と称せし处あり・但八象と名ふ貯けが故
より昔郡中内地を分川水・姑北内堺より換地を打娘辻
が六所り・中積ニ十六町あり・此六町を北より南へ行
を條と云西より東へ行を里と云然る時ハ埼玉郡の
中を流る綾瀬川乃南岸より六町を一束・十二町を二

八條近江守藤原房繁肖像 木村長光筆

木村長光筆



王續三ノ十八



信充繪圖

條十八町を三條・廿四町を四條今四条案三十町を八條卅六町を六條・四十二町を七條・四十八町を九條と云即今乃八條村乃地あり復讐川乃南岸より八條是兩村乃存在し依て拾芥抄由藉部小輩大分條里乃圖を證發されを得へし茲又時も平城宮乃典刑乃一鞭を仰曉を承ふ是里此村乃八条官ハ柔敷乃廟と云弘安七年乃碑あり其名字乃徵モテヒヨウ也

房敏繁小笠原民部少輔植盛又隨て甲斐源氏子傳入玉馬藝を習人抑皇朝又馬を乘て神代不濫觴一人皇乃世とあらず神功皇后も威武を耀たり新羅王を飼事と云一乾坤と共ふ長く馬梳馬鞭乃貢を徵先恭天皇も薩

摩乃隼人を平ヶく所形乃旋毛也於馬を得大分湯坐連入額田都乃姫を賜ひとやか也申す由秦氏乃祖よく是を乗得しかり帝是を褒き者ふせりせよハ生駒山乃故ち餉夫め玉人然め其駒と云矣元々是也駒高麗の方言也亦馬乘乃法を後ふへ推古天皇乃御時額田都比羅史膳良大体新羅任那使を迎入款莊馬乃長と云々走大里去を以く考人也は額田都膳良又馬を乘てを傳す亦多歟一但秦氏も牧乃馬を餉すて是を馳驅と云御を索く額田都膳良既馬乃威儀を主とせアからん文宣天皇乃御時軍團乃兵士等る乗る馬も牧馬乃體骨強壯也御乃字廬牧令義解不見也譲草ふしく乘用不甚大

るを軍團入射して食をもと食う見ゆくとひ其樂強
小必秦氏ア傳人少術と同シかかへ。軍防令乃文入モ
弓馬と舉たる少小義解ふば弓とハ歩射・馬とは騎射と記
させし大もハ兵士乃藝秦氏を祖述モト也。其伎決シテ騎射
ある魚ノ。軍團乃兵士・節衛士・衛士下日奉府小至
マ教習シス。弓馬也亦同一やがへ。然ハ近院乃右府乃貞
純親王不傳ラ色川易伎モナ。高麗流朱里レヒ凝カ一
高麗八索流乃傳統小貞純親王を貞純親王も六孫王經
祖ト記セリ。此由縁ト知ヘ。一
基ム傳多六孫王モ滿仲朝及不授け滿仲朝及も頼光頼
信兩朝長ア傳小頼光朝臣乃子尤馬權頭頼國朝及統前
守頼家頼信朝臣乃子伊豫守頼義朝長陸奥守頼清・井上三

即賴季信濃國高井郡井上御入生ミ。賴季乃ぶ了井上モ即
小高井大室笠原乃牧ありハ是等何内冠者頼任常盤立即
義政去也を相承一ノ名其子孫ア傳人中入新ノ賴義朝
臣乃嫡子陸奥守義家朝及ニ男刑部丞義光最此伎ア妙
ア里高麗八索流乃傳統アハ幡太郎義光乃男進士判官
代義葉武田刑部二郎義清父乃藝を襲マ名を寰寓小揚
義清乃ア逸見太郎清光清光乃子武田少郎信義少賀美
次郎遠光よく箕裘を襲リ高麗八索流乃傳統ア加賀美
縁ア遠光九代乃孫を彦次郎貞良と云。兒信濃守貞宗ニ
共小寺持院將軍家尊氏乃味方ア弓馬乃藝也。少子称
せら也大里貞良を大膳大夫貞良と云。信濃守ト記モ且
房繁の師と云。然也共・房繁ハ永正中の入

五皇子貞長と時貞長五代乃孫を備前守持長と云。大輝武
代同一からい。部大輔直秀乃師か里直秀も大輝持長八代乃孫即植盛
か里

或家馬法書ふ傳統を叙かく云。周穆王乃御者。楚又より
梁武帝乃傳之。武帝より小笠原長貞乃傳ふと於里。送
父も史記乃趙乃世家小周成王乃時ふ宅臯狼と云者
あり。宅臯狼乃子を衡文と云。衡文乃云。周
乃穆王不仕西ふ巡狩を執と云。御と云。西王母と見
歸く趙城。小封せらむ。子孫趙氏とある。周穆王元年庚
辰も神武天皇即位辛酉より三百に十一年前より梁の
武帝即位天監元年ハ武烈天皇十四年壬午か里神武天

皇即位辛酉より一千百六十二年ふ當也ハ周穆王即位
を距て一千八百年か里。造父より梁武帝不傳人云
理か。一梁武帝も欽明天皇十年八月崩す。小笠原長
貞も建武延元乃際乃人か里其相距て八百年不及人
也。也ハ武帝より長貞不授くへり。不取也。

永正五年十月植盛乃印可を得たり。燒印圖乃奥書ふ見
奥。了。永正五年八月。其後房繁入復く。學人者少。家寔之澤
源五郎親満も永正十五年九月印可を得。長尾丹後守景
家も享禄二年十一月六月焼印圖を免。其後太田孫二郎秀
家も天文十八年六月吉日。世寶集を授けらる。野崎新八
郎も同廿四年三月。世寶集を受。一書ふ。野崎新八郎。孫治
二年二月印可を得。と云。

野嶺・野嶺一宇乃妻乃同人章丸延安吉も天正六年六
月印可を得屋代因矣衛種長山方知齊が治勘解由左衛

門家範もあ入室乃弟子大足

長尾丹後守景家も上野國群馬郡白井乃長尾の庶子
お通共そ乃父を知と景家伎を屋代玄蕃入道重高又
傳へ一書入天文九年十月重高景家不重高も永祿二
年二月子息丸近將監重後昌軒とあり了印可し重後
も羽葉毛驥守氏郷荒川妻兵衛重世・埴原次郎右衛門
備原一卒入天正五年七月埴原不傳ハ各其弟子了毅
く流派連綿たり

水添勘解由左衛門家範乃ふを勘解由左衛門家高と

六家高乃子を勘解由左衛門家定と云家定乃子を勘
二郎直範と云直範乃子を丹波守直宗と云直宗乃子
を勘え通直照と云直照乃子を下野守直好と云直好
乃弟子を曲木源次郎安起と云

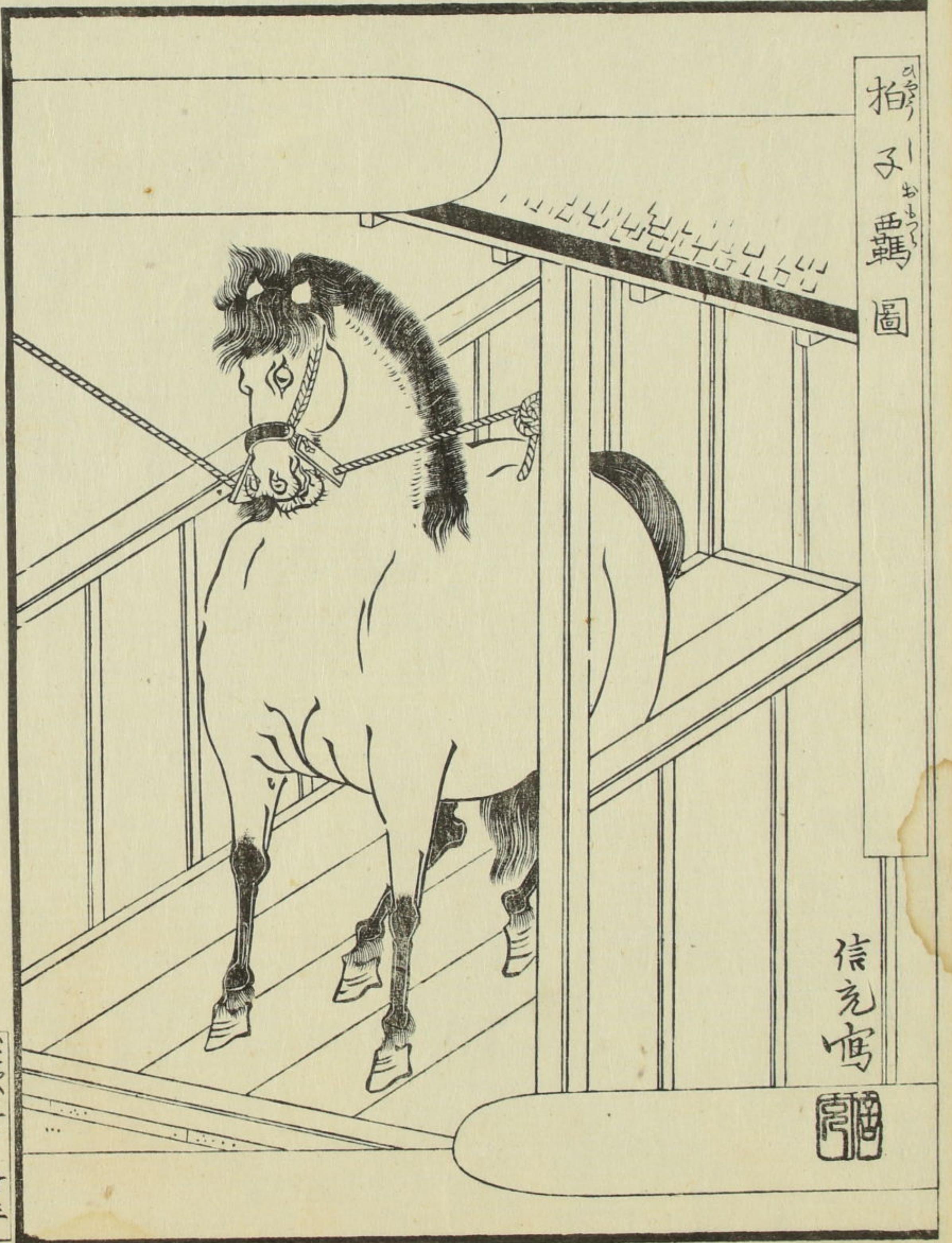
房繁乃子を六郎朝繁と云父う藝を繼く世子著るる其
弟子ふ・氏家參河守高純・高純乃弟子う・衆袋監物高周・高
周内弟子衆袋牛雲守隆胤・隆胤乃弟子猿原織部正清
房繁の弟を兵部大輔房胤と云兄と伎を等くひ其門子

遊入者多し

或六八條近江守房繁乃許へ南部櫛乃黒馬乃筋骨櫛
アシカく逞しきを牽未ば馬いろみかに強くあく乗得る

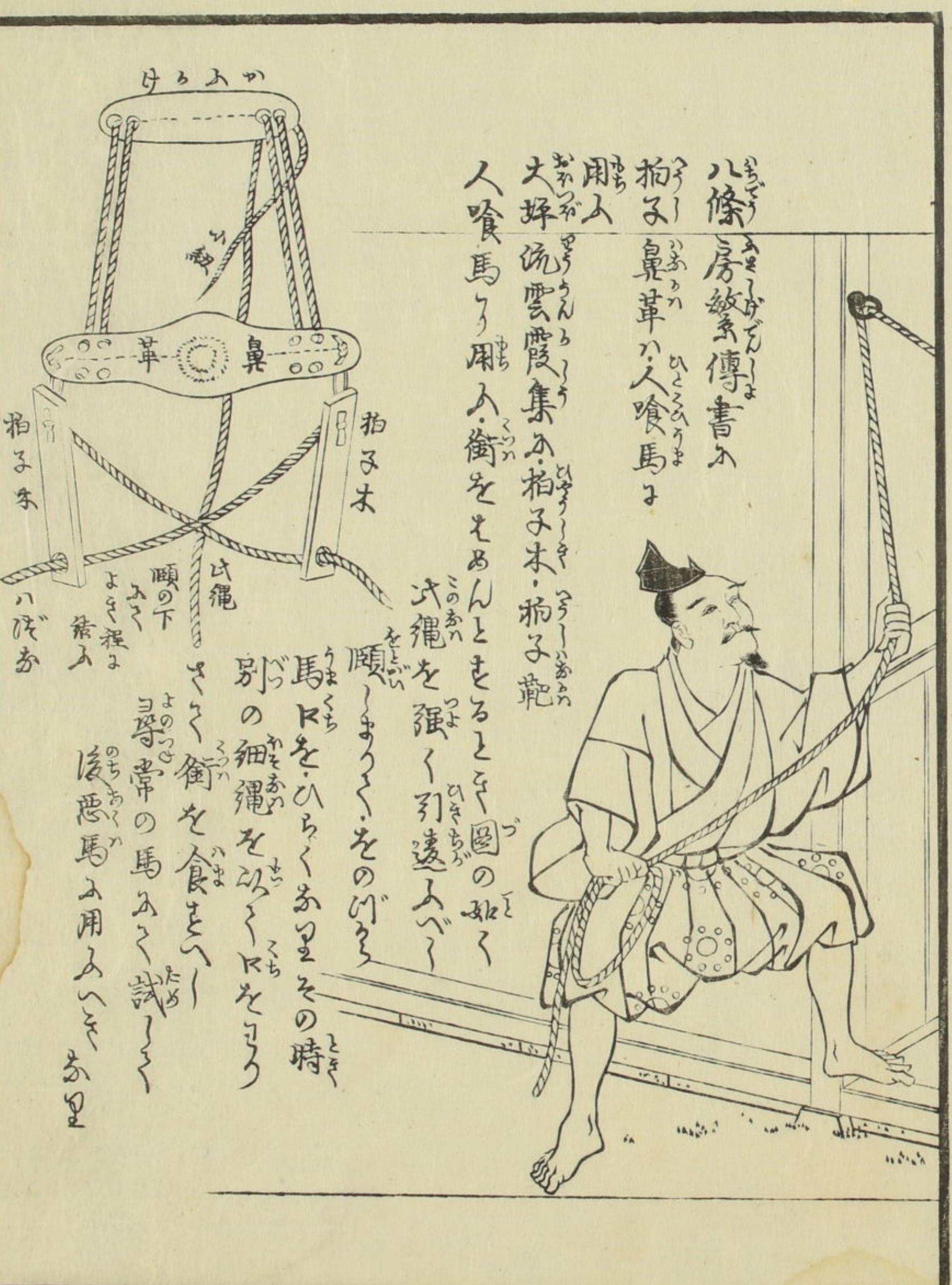
拍子西鶴圖

信充寫



王絃三ノ廿三

八條
房致繁傳書人
用入
鼻革
人喰馬
大奸
流雲霞集
人喰馬
人喰馬
用入
衡
馬
別の細
さく
衡
馬
常の馬
後惡馬
用入
あり



人かし天晴乃名馬あらゆ世子不用あり。若より地道りよ
平ア坐リ。乘試みひそんやと。寺歎モホラ。房繁熟視て
此も乘へき術あり。若我ら入伍。乗得あは。布ヘ近ア
代川魚トヤと。に限らぬ。お庭より下。拘子木を掛け分
ア馬静まゆく。尋常がう。應々裸脊ふ。打乘ふ。内徑計
馳課スケ里。其後。結城布一足。馬主ノ取セ。良馬得
と。不く。特笑あう。衡をませ。鞍をく。能馴ア。改モト。更
ニ初木似と。打乘より馳止ム。かと。進退周旋を極く範
シ違フ。とか。馬主ヨ。ふ。不思議。け。恐ふ。面持ふ。斯
家名蹄を布一足。ア代ア。リ。又我。不運ア。ヒ。と細詫
を。房繁。例。去。は。出。我。始。リ。は。約。リ。家。家。也。個是ハ

末代ア。有難キ。馬。アリ。赤喙黒身。を。驥。裏。と。名。神馬也
と云。是馬乃類。亦。豕。之。又龍馬。も。神馬。アリ。河水乃精
鬼。高八尺八寸。周漢。ア。八尺八寸。日。軒。長頸。か
若く。骭。上。骭。也。後脰。之。翼。あり。傍。毛。を。無。鳴聲。九音。明
王。あきは。則。見。ると。か。や。星。馬。龍。馬。と。云。川。底。一。背。乃。造
父。は。驥。裏。又。周。穆。王。乃。御。ト。ア。之。自。ア。年。里。を。紹。蜀
乃。昭烈。皇帝。も。的。盧。と。乗。く。擅。溪。ニ。丈。乃。嶮。を。彌。レ。と。云
は。武。士。乃。寶。ハ。良。馬。ア。過。る。カ。ア。レ。い。く。其。悦。云。ん。と
云。す。ア。飯。袋。ア。納。た。か。黃。食。を。取。出。レ。其。儘。馬。も。ふ。取
せ。大。也。は。馬。主。又。驚。キ。是。ハ。思。ル。依。タ。馬。乃。價。過。分。ア。渡
と。云。を。否。是。モ。價。ア。報。タ。悦。乃。為。ア。里。價。モ。布。一。足。よ。と

云々直上内了入。まく出合ねばせんがふく馬主も飯
袋乃黄令持歸里儀ヲ徳着一とあつ爰み拘子木と云
え、拘子鼻革と云。今も猶南部乃牧又傳もくに強
き馬了拘。聞ると云里房繁乃始く制也る物と云。人由
有ふや去とゆ。西園寺家乃鷹島の書ふ馬ふ拘又掛て鷹
遣人と云と見へたきはハ條乃家みく制し初一ふハ
あゝ所弓射里大狩奉湯常取鬪霞集ふ。由・拘子鼻革の
ろふゆ
或說ふ大妹式部大輔慶秀ひよ、鹿島孫二郎と云
頃信濃國了住。高麗同縁馬藝を受傳ふとあり。慶秀
ち明應元年八月十日行年八十に歳ふ卒と云

應永十六年己丑歲ふ生也夫承人般里。其鹿島孫二郎
と称せ一也。正長承亨乃際と聞ハ小笠原備前守持長
之時を同一く也。房繁乃祖父匠作滿朝乃代了當
然らハ高麗流房繁み始る了承も小笠原氏ヲ傳え矣
又皇朝相承乃古藝あると說を待ひ。又慶秀乃子村上
加賀守永幸そ乃弟子齋翁。兵庫允國忠。そ乃弟子小笠
原備前守植盛。其の弟子齋藤伊豆入道芳蓮一本芳蓮
其弟子佐々木左京丈史義賢入道一と相傳せ。馬
法書小新高麗流と義賢乃自筆了顯。一能登齋翁安藝
守好玄了興へ大ふ座を奥書せ。書あり。蓋高麗流も
小笠原家の藝あるふ依て慶秀自得乃妙を集め。大

成一別ふ名付く新高麗流と號せしからん。

又一說ニハ幡大即義家朝反より八條高倉院ふ傳へ
高倉院も前近江守憲勝ふ傳へ憲勝も左衛門大史房
敏繁ふ傳ふ始八条高倉院ヲ起ふを以て八條流と云ふ
亦是今考ふ義家朝後も鳥羽院乃天仁元年六十九歳
入ぞ卒し高倉院も永曆二年ふ降誕す而もその相距
と及ふ十三年ふ及不然ハ義家朝反より高倉院ふ傳ふ
と云ひ誤ふ里・但高倉院も遅延乃後土御門高倉の
御所ノ御座川也は世子へ高倉院と称し本是土御
門の高倉も今上長者町土御門高倉ふ當る今内裏の
あるへ又八条乃高倉ノ平内府宗盤乃序ある時壽永
ミヌヤ又八条乃高倉ノ平内府宗盤乃序ある時壽永

二年乃吉記了見ゆきり去と由家盛云乃亭ふ高倉院
乃御座とも考ふ所あり或も高倉院乃非也高倉院
あらんと云ひ高倉院も高倉院乃庶兄ふく以仁王と
称むと柔高倉ふ御座ありりかば帝玉編年記年家物
語う見ゆきり然る時も琳官也八条高倉ふ住せらむ
けんて覽東あし且茂仁王も義家朝反卒後に十一年
ふ誕生ありかは傳授乃說も信じ難し前近江守
憲勝も未考ふる據を知り推考を承ふ比傳統を必誤
あらん

威も馬方百首を房敏繁の詠せし處形りとゆふふや
持毛は房敏繁より長尾景家了傳へ一卒あふを以て殆

云あ家西一但より百首も大坪吉利入道直弟乃作也
百首乃第四了

鞍乃うち十八乃曲尺と鐘了ハ八乃品あふ物と
角一とあふふく角龜を扱里十八乃曲尺とモ直弟乃
清水寺觀音より傳へた承と云鞍乃觀經より前輪
七雙後輪六六雙由木了二雙出走を十八乃權衡と云
鞍具紋板高首腋付闇木食糸縁食擗材あとを鐘の
八品と云是等内事容易の人ふ傳入へきり非久依く
歎入作里く子弟ノ教訓せ一を大坪菴主慶秀式部大
相傳あくそ内子弟ノ教入慶秀の子弟其本源を詳問
生致す及ち久遠久断く慶秀の作と以承了至るを承

於里慶秀既了此百首を傳入る時も房紋繁の作了承る
ことの論をすくい伊勢安齋邊袋了馬於百首ハ大坪慶
秀乃作と記さきつとし小今取を

東都書林

外神田本町代地

紙屋徳八

本石町十軒店

英大

助

先進精像弘不雜誌續篇卷第三段 男信那圖畫并校字

天保十八年甲辰五月下旬

開板不苦以追而出来之上卷部

學問所可被相納之事

栗原孫之丞藏板

大坂書林江戸

心齋橋通北久太郎町

心齋橋通備後町

心齋橋通木町北

心齋橋通博良町

日本橋通一町目

日本橋通二町目

日本橋通三町目

芝神明前

日本橋四日市

横山町三町目

大傳馬町二町目

下谷池之端仲町

紙

岡

屋

村

屋

庄

德

八助

八

助

